

すれ違い

「なんにもわかってないくせに！」そう言い放ち、私はリビングのドアを大きな音を立てて閉めた。父は私の苦勞を知らず、その割に「ちゃんと勉強しているのか。」「受験生なのにそんなんで大丈夫か。」と口出しをしてくる。今までは適当に返事をしていたが、その日はついに我慢ならなかった。昔は二人で公園へ遊びに行ったり、夕食を食べに行ったりしたものだ。だが思春期に入ってからというもの、まるでそこにはいないかのような関係になっていた。

私は夜遅く勉強していると、どうしてもお腹が空いてしまう。最近は毎日、夜な夜な冷蔵庫をあさるような生活をしてきた。母が気がついて夜食を用意しようと起きてしまうのは悪いので、静かに、ひっそりと行動した。そんなある日、今日も冷蔵庫を見に行くか、とリビングに近付いたとき、何やら音がした。覗いてみると、普段はまったく料理をしない父が、なんとキッチンに立って何かを作っていた。呆然と、不思議そうに立っている私を見て父は言った。「父さん、腹が減っちゃってさ。お、ついでに食べるか。」そういう父の手元を見ると、私の返事より先に、お皿もお箸も二つずつ、もう二人分用意してある。お父さん、もしかして…。私はあえて何も聞かなかった。

父の作った卵焼きは焦げていて極端に甘くて、おにぎりは私の手におさまらないほど大きく不格好だった。「ありがとう。」小さく呟くと同時に、思わず目頭が熱くなった。「おまえ、昔からしゃげが一番好きだもんね。」父のにっこりと微笑む笑顔に、温かくてとても懐かしい気持ちになった。私は、大きすぎてまだまだ具まで遠く、何の味もしない白飯を口いっぱい頬張りながら笑顔で言った。「うん、やっぱりしゃげが一番美味しいや。」